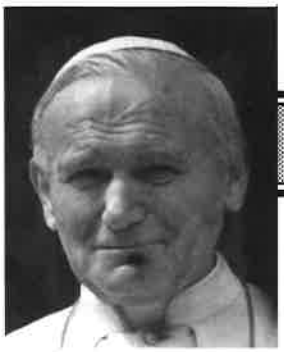
平成10年（1998年）8月10日発行　第220号　（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）



教皇様の聲 8 220号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1998

最初に栄光を受けた方、聖マリア

（…）マリアの被昇天は、特別にキリストの復活にあずかっています。聖パウロはこの真理を強調して、キリストの復活がもたらした、死に打ち勝つ勝利の喜びを宣言します。「キリストは全ての敵をその足の下に置くまで支配せねばならぬ。最後の敵として倒されるのは死である。」（Iコリント15・25～26）

キリストが復活した日、明らかになった死に打ち勝つ勝利は、今日、その御母と特別な方法で関わってきます。死が御子の前に無力であるなら、その母、御子に地上の生命を与えた御母の前では、なおさら無力であるはずです。

コリント人への第一の手紙の中で、聖パウロは被昇天の秘義についての意味深いコメントを残しているようです。「キリストは死者の中から復活し、死者の初穂となられた。一人の人間によって死が来たように、一人の人によって死者の復活も来た。全ての人がアダムによって死ぬように、全ての人はキリストによって生き返る。しかしそこに順序があり、まず初穂であるキリスト、次に、来臨の時キリストの者である人々が続く。」（15・20～23）マリアは、「キリストの者である人々」の第一の御方です。被昇天の秘義において、マリアは栄光を受けた最初の人物です。被昇天は復活の秘義の頂点を表わしていると言えるでしょう。

キリストは復活し、原罪の結果である死を打ち負かしました。この勝利には、キリストの復活を信じる全ての人々があずかっていますが、その最初の一人はキリストの御母で、御子の十字架上の死による贖いのおかげで、原罪の結果から免れていました。今日、キリストは、原罪なく宿った母マリアを、栄光を受けた身体ともども天国に迎え入れます。あたかも御母のために、人類の待ち望む地上への栄光の帰還の日・全てが復活する日を早めるかのようです。被昇天は、全てが神において成就するその時を予告するような、素晴らしい出来事です。「そして終わりが来る。そのときキリストは…父なる神に国を渡される。…神が全てにおいて全てとなるためである」（Iコリント15・24、28）と使徒が言うように。贖い主の無原罪の御母にとって、神が全てではなかったでしょうか。

父なる神の娘、神の御子の母、聖霊の神秘な花嫁、聖三位一体の神殿よ、あなたに挨拶いたします！

「そうして天では神の神殿が開け、その中に契約の櫃が見え、…それから壮大なしるしが天に現われた。太陽に包まれた婦人があり、その足の下に月があり、その頭に十二の星の冠をいただいていた。」（黙示録11・19、12・1）　黙示録に見えるこの描写は、ある意味でマリア論の決定版と考えられます。しかし、ここで壮大に描かれた被昇天は、教会論の中でそれ自体の意味を持っています。教会論では、マリアを全被造物の女王と見るだけでなく、教会の母であると考えています。教会の母として天国で冠を受けたマリアは、今も教会の歴史に、善と悪の戦いの歴史に、関わっています。ヨハネは書いています。「また天に他のしるしが現われた。…赤い竜がいるのが見えた。」（黙示録12・3）聖書ではこの竜は、創世の書の始めから女の敵として知られています。（創世3・14参照）

黙示録では、同じ竜が出産しようとする婦人の前に立ち、生まれるのを待ってその子を食おうとします。（12・4参照）ベトレヘムの夜、「その付近の地方にいる二歳以下の男の子を皆殺しにしようとして家来を送った」（マテオ2・16）ヘロデの命令によって、生まれたばかりのイエズスの身に危険が迫ったことを思い起こさせます。

第二バチカン公会議以降、神の御母の姿はキリストと教会の秘義と深く結び付くようになりました。神の御子の母マリアは、御子において天の御父の養子となった全ての人の母でもあります。ここで、私たちは教会の絶えざる戦いを目にします。母のように、そしてマリアのように、教会は子供たちを神の生命に生み、そして教会の子ら・神の御独り子の息子と娘たちは、常に「赤い竜」であるサタンの敵意にさらされているのです。

歴史を通じて続くこの戦いの真実性を語りつつ、黙

示録の著者は婦人の、私たちの弁護者マリアの、最後の勝利を見通しています。マリアは全人類の頼もしい同盟者です。黙示録著者は勝利について語ります。「私は天にとどろく声を聞いた。〈神の救いと力と国とそのキリストの権威はすでに来た。〉」（12・10）

私たちの目前にある荘厳な被昇天は、全被造物に及ぶ、神とキリストの支配力のあらわれなのです。（…）

（95・8・15、被昇天の大祝日のミサにて。）

大勢の人が神の招きに応えるように…

（新司祭の叙階式を終えた後、正午のレジナ・チェリの祈りにて。）

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。

復活祭第四主日である今日は、世界召命祈願日、「善き牧者の日曜日」とも呼ばれています。ヨハネ福音書の有名な箇所で、キリストを「羊のために命を捨てる善い牧者」であると宣言した一節（10・11）が本日の典礼に出てきます。

このように典礼上ことさら意義深いこの日、聖ペトロ大聖堂でローマ教区の30名の新司祭を叙階する喜びを得ました。一人ひとりの上に聖霊の助けをこいねがいます。すばらしい秘跡の恩寵で彼らを善き牧者キリストの役務者に任じた聖霊の助けにより、言葉と秘跡を通じて信者たちに「命を、豊かな命を与える」（ヨハネ10・10）ことができますように。

皆さん、どうぞこの若い司祭たちのためにお祈りください。またローマと世界中で、主の呼びかけに寛大に答えて、福音に仕えるため命を捧げる人がたくさん現われるよう、お祈りください。

5月1日、働く人々の祝日が各地で祝われましたが、これはとても大切な日です。個人と社会の生活の中で仕事の持つ意味を深く考える良い機会です。

私はこの日、特別に祈りの中で、近年仕事の世界を悩ませている問題、すなわち失業や児童の苛酷な労働、しばしば危険な状況に置かれている労働条件などについて神にお話ししました。政治や労働組合の力で、適切な解決方法を探ることを希望します。

今や問題は、地球規模化の波に乗ってますます急を要する状況です。人間の仕事の尊厳と働く人の権利が常に尊重されますように。

聖母マリアはあらゆる召命の模範として私たちの前におられます。全てを神とその御国のために捧げるよう呼ばれて応じた人々のみならず、結婚生活や職業生活の中で信仰を証ししようとする人々にとっても。

キリストご自身もそうでしたが、聖母も人間活動のこの両方の面をすばらしく完璧に結び付けて生き抜かれました。ヨセフの妻、イエズスの母としてナザレトの家庭にあった聖母は、神のみ旨に従って御子を育て、教育しました。イエズスが家と大工の仕事場を離れ、父である神から託された救いのわざに身を捧げることになった時、聖母は深い信仰をもって、十字架と復活に至るまで御子につき従い、教会の模範・母となりました。

信頼を込めてマリアを仰ぎましょう。御母の取り次ぎを頼めば、主は必ずや、神の御国に仕えるためのたくさんの聖なる召し出しを与えてくださることでしょうから。

（98・5・3）

神の贈り物・父子関係

聖霊シリーズ　7

1　前回は使徒行録に記されたエルサレムでの聖霊降臨の際の「神の顕現」について、外から見える要素を考えてみました。「激しい風が吹くような音」、高間にいた人々の頭上に降った「火の舌」、そして使徒たちが他国の言葉で話したこと、などです。このような一見して明らかな要素以外に、最も重要なことは使徒たちが内側から変わったことでしょう。これこそ、弁護者である聖霊の存在と働きを示すものです。自分が父のもとに帰れば聖霊を送る、と使徒たちに約束したのはキリストご自身でした。

聖霊の到来は、十字架上の贖いのいけにえとキリストの復活によって成就し、「新しい生命」をもたらした過越の秘義と深い関わりがあります。聖霊降臨の日、使徒たちは聖霊の働きによってこの生命に深くあずかり、こうして主の復活を証言する力が彼らのうちに育ったのです。

2　聖霊降臨の日、聖霊は生命の与え主であることが示されました。私たちは使徒信経で「聖霊・生命の与え主を信じます」と宣言します。こうして、神の似姿として造られた人間に、神が「ご自分をお与えに」なった時から始まった、自らを与えるという神の計画が完成しました。神のこの自己贈与は、人間が造られ、超自然の尊厳にまで高められるという秘義に始まるのですが、人間が罪を犯した後は、歴史の中で救いの約束という形で現われ、神であり人であるキリストの贖いの秘義において、キリストのいけにえに

よって成就しました。

キリストの過越の秘義につながる聖霊降臨で、「神の自己贈与」が完成します。エルサレムでの神の顕現は、神の自己贈与が聖霊において「新たに始まった」ことを示しています。その日高間でキリストの母マリアと共にいた使徒たちほか全員が、神の生命が新たに「降り注ぐ」のを体験する最初の人々になったわけですが、この生命は彼らの内で彼らを通じて、すなわち教会において教会を通じて、全ての人に届きます。それは普遍の生命です。贖いが普遍であるのと同様に。

3 「新しい生命」は、神の養子となる賜物に始まります。これはキリストが贖いを通して万人のために獲得し、聖霊が全ての人の上に広げる賜物です。聖霊の恩寵は人を作り変え、人間を言わば「創造し直し」て、御父の独り子に似たものとします。このようにして、託身したみことばは神の「自己贈与」を更新し、さらに強固にします。贖いを通じて、ペトロの第二の手紙にあるように、人間を「神の本性にあずからせ」(1・4）てくださいます。聖パウロもローマ人への手紙の中で、イエズス・キリストが「清い霊としては死者からの復活によって神のみ子と力強く定められた者である」(1・4）と述べています。

神の子キリストの力を遺憾なく発揮させた復活の実りが、こうして聖霊の働きに心を開く人々に分け与えられます。それは神の養子となる新たな賜物です。聖ヨハネは福音書の冒頭で、人となられたみことばについてふれた後、「その方を受け入れた人々、そのみ名を信じる全ての人たちにはみな神の子となれる力を授けた」(ヨハネ1・12）と述べています。

二人の使徒・ヨハネとパウロは、神の養子となることが人間への新しい生命の賜物であり、それはキリストによって、聖霊を通じて与えられることを理解していました。

養子とされることは、御父からの恵みです。ヨハネの第一の手紙によると、「考えよ、神の子と称されるほど、御父から計りがたい愛を受けたことを。私たちは神の子である。」(3・1）ローマ人への手紙で、パウロは同じ真理を神の永遠のご計画に照らして解説します。「神はあらかじめ知っている人々をみ子の姿にかたどらせようと予定された。それはみ子を多くの兄弟の長子とするためである。」(3・29）エフェゾへの手紙で、パウロは養子として神の子となることをこう言っています。「イエズス・キリストによって私たちをご自分の養子にしようと予定された。」(1・5）

4 さらにガラツィア人への手紙では、パウロは神が三位一体の生命の奥底で考え出された永遠の計画について語ります。その計画は「時が満ちて」御子が私たちを養子とするため人となられた時、実現しました。「女から生まれさせた子を…神は遣わされた。それは私たちを養子にするためであった。」(ガラツィア4・4～5）使徒によれば、三位一体のうちで御子の使命と密接に関わっているのが聖霊の使命です。「あなたたちが神の子である証拠は、〈アッバ、父よ〉と叫ぶみ子の霊を神が私たちの心に遣わされたことである。」(4・6） こうして私たちは、聖霊降臨で示された秘義の「終着点」に達します。御子の霊である聖霊が「私たちの心に」くだった。御子の霊であるからこそ、聖霊は私たちがキリストと共に「アッバ、父よ」と叫ぶことができるようにしてくださったのです。

5 この叫びは、私たちが神の子と呼ばれるのみならず、実際に「神の子である」ことを示しています。使徒ヨハネの第一の手紙（3・1）で強調されているとおりです。賜物のおかげで、まことに私たちは神の御子イエズス・キリストのような子としての身分にあずかっています。これが私たちとキリストとの関係を示す超自然の真理です。これがわかるのは「御父を知っている」者だけでしょう。(Iヨハネ2・13参照)

聖霊が教えてくださらなければ、私たちに分かるはずはありません。使徒パウロは言っています。「霊御自ら私たちの霊と共に、私たちが神の子であることを証明してくださる。私たちが子であるのなら世継ぎでもある。キリストとともに世継ぎである。」(ローマ8・16～17）「あなたたちは再び恐れに陥るために奴隷の霊を受けたのではなく、養子としての霊を受けた。これによって私たちは〈アッバ、父よ〉と叫ぶ。」(同8・15)

6 霊は人間のうちに御子の姿を「再現」します。こうして、キリストと共に「アッバ、父よ」と叫べるほどの親密で「兄弟のような」きずなを作ってくれるのです。そこで使徒は「神の霊によって導かれている人はすべて神の子らである」(ローマ8・14）と書いています。聖霊は御子の霊として信者の心に「吹き込み」、人間をキリストと似た者・キリストに一致した者として神との父子関係を確立します。聖霊は人間の霊魂を、キリストという神的模範にかたどって内側から形成します。このように聖霊を通して福音書のページの中のキリストが「霊魂の生命」となり、人間の思いや愛、判断、行動、さらに感覚までもキリストのようになります。「キリストに似た者」となるわけです。

7 このような聖霊のわざの「新たな出発点」となったのが、過越の秘義の頂点に位置するエルサレムでの聖霊降臨です。以来、キリストは「私たちと共に」おられ、聖霊を通じて私たちの内で働き、御父の永遠の計画を実行し続けておられます。御父は「イエズス．キリストによって私たちをご自分の養子にしようと予定された」(エフェゾ1・5)。このすばらしい信仰の真理を、たゆまず繰り返し黙想しましょう。

（7・26）

処女懐胎は聖霊のはたらき

「聖母マリアと教会」シリーズ　18

1　教会はマリアの処女性を信仰の真理として変わらず保ってきました。ルカ、マテオ、そしておそらくヨハネの福音による証言を受け継いで、考察を重ねてきたのです。

お告げの場面で、福音史家ルカはマリアが処女を守るつもりであったこと、そしてマリアの意志と母になることとを両立される神のご計画とを示した上で、マリアを「処女」と呼んでいます。処女懐胎を聖霊の働きによるものと断言することで、自然の単為生殖という仮説や、ルカの記述をユダヤのテーマの発展や異教徒の神話伝説からの派生とする説がしりぞけられます。

ルカの本文（1・26～38、2・19、51参照）を見れば、どんな縮小解釈もできないでしょう。本文の首尾一貫性は、聖霊による処女懐胎を証言する言葉や表現を切り捨てることを許しません。

2　福音史家マテオは、ルカと同様、ヨセフへの天使のお告げの場面で、懐胎は「聖霊によって」（マテオ1・20）起こったことであり、結婚の関係によるものではないと断言します。イエズスの処女懐胎は後からヨセフに伝えられました。それはヨセフにとって、聖霊による超自然の介入の結果であり、母親ただ一人の協力によるマリアの懐胎に前もって同意するかどうかという問題だったのではありません。ヨセフはただ、処女の夫としての役割、子供の父としての使命を自由に受け入れるよう要請されたのです。

マテオはイエズスの処女からの誕生をイザヤ預言の実現であるとしています。「見よ、処女が身ごもり、一人の子を生み、それをエンマヌエルと呼ぶだろう。」「その名は『神はわれわれとともにまします』という意味である。」（イザヤ7・14、マテオ1・23参照）このように、マテオを見るかぎり、最初のキリスト教共同体では処女懐胎について考察がめぐらされ、それが神の救いの計画に一致するものであることと「われわれと共にまします神」イエズスその人との関係を理解するに至ったことが結論づけられます。

初代教会は処女懐胎を堅く信じた

3　ルカやマテオと違い、マルコ福音書はイエズスの懐胎や誕生、またマリアの夫ヨセフについて言及していませんが、別に意味はありません。イエズスはナザレトの人々から「マリアの子」と呼ばれ、また他では何度か「神の子」と呼ばれていました。（3・11、5・7。1・11、9・7、14・61～62、15・39参照）この事実はイエズスの処女懐胎の秘義への信仰に一致しています。最近の聖書解釈学上の知見によると、この真理はヨハネ福音書の第1章13節にはっきりと述べられています。イレネウスやテルトゥリアヌスのような古代の権威ある著者は、通常の複数形を用いず、「彼は血筋ではなく、肉体の意志ではなく、人の意志ではなく、ただ神によって生まれた人である。」単数形で表わされたこの一節によって、ヨハネ福音書の冒頭はイエズスの処女懐胎を証明する代表的な箇所として託身の秘義の文脈の中に位置づけられています。

パウロの逆説的な断言「しかし時満ちて女から生まれさせたみ子を神は遣わされた。それは私たちを養子にするためであった」（ガラツィア4・4～5）は、御子の人性と処女からの誕生の疑問に答えるものです。

福音書は、イエズスの処女懐胎への信仰が初代教会のさまざまな場でしっかりと根付いていったことをこぞって証言しています。したがって、処女懐胎を肉体的・生物学的にではなく、イエズスを神から人類への贈り物として表わした象徴的・比喩的な表現に過ぎないと解釈する最近の説には、根拠がありません。他の人々が主張している意見についても同様です。処女懐胎の話はイエズスが神の子であるという神学上の教えを表わすものであるという説、イエズスの神性を表わす架空の描写であるとする説などです。

すでに見たように、福音書は聖霊がもたらした生物学的秩序にそった処女懐胎について明確に述べています。教会は信仰形成の最初期からこれを真理と受けとめてきました。（カトリック教会のカテキズム496番）

4　福音書に示された信仰は、後の伝承によっても変わることなく確認されました。初期のキリスト教著作者たちの間で定式化された信仰は、処女からの誕生の確実さを前提としていました。アリステイデス、ユスティヌス、イレネウス、テルトゥリアヌスなどは、イエズスが「まことに処女からお生まれになった」（Smyrrn. 1, 2）と述べたアンティオケのイグナツィウスと同意見でした。この著者たちはイエズスの処女懐胎を歴史上実際に起こったこととしており、処女性が子供の誕生に際して示されたあやふやな精神的恩恵に過ぎないとは考えませんでした。

信仰に関する全教会会議や教皇教導職の荘厳な決定は、最初の短かい信仰宣言に従って下されましたが、それはこの真理と完全に一致していました。451年のカルケドン公会議の信仰告白では、明確な定義づけを注意深く表現して、「人間性においては終わりの時代にわれわれのため、またわれわれの救いのために、神の母処女マリアから生まれた」（DS〈カトリック教会公文書資料集〉301番）と述べています。同様に、第三コンスタンチノープル公会議（681年）ではイエズス・キリストは「人性においては、…聖霊によって処女マリア

から生まれた。そのため彼女は真の意味で神の母である」(DS 555番)と宣言されました。その他の教会会議（第二コンスタンチノープル、第四ラテラノ、第二リヨン)でもマリアの永遠の処女性が強調され、「終生処女であった」と宣言されました。(DS 423, 801, 852番)

これらの宣言は第二バチカン公会議でも取り上げられ、マリアが「信じ従い、しかも男を知らず、聖霊に覆われ、…父の子自身を地上に生んだ」(教会憲章63番）事実が強調されました。公会議が定めた定義に加えて、教皇教導権による「神の母処女マリア」の無原罪の御宿り(DS 2803番)と、「無原罪の神の母、終生処女」の被昇天(DS 3903番)に関する定義があります。

マリアの聖性は処女性と深く結びついている

5 しかし、教皇マルティン1世の希望による649年のラテラノ会議を別にして、教導権のくだした定義では「処女」という言葉の意味は説明されていません。この言葉が通常の意味、すなわち夫婦行為を自発的に慎むことや、肉体の完全性を保つという意味で用いられているのは明らかです。とは言え、肉体の完全性はイエズスの処女懐胎への信仰に欠かすことのできないものであると考えられます。(カトリック教会のカテキズム496番参照)

「聖であり、終生処女、無原罪」というマリアの姿は、聖性と処女性の関係に注意を促します。全ての心を神に捧げたいと願うマリアは、生涯処女であることを望んでいました。被昇天の定義に見られる表現「聖なる終生処女、神の母」はマリアの処女性と母性の結び付きを示しています。二つの特権は、真の神・真の人であるイエズスの託身において奇跡的に結び付きました。こうしてマリアの処女性は、神的な母性と完全な聖性にしっかりと結ばれたのです。 (96・7・10)

使徒書簡「ディエス・ドミニ(主の日)」

〈7月7日、聖なる主の日を守ることをテーマに掲げた使徒的書簡 Dies Domini（「主の日」、5月31日付け）が発表されました。ここではいくつかの大切な点を中心に、その内容をまとめてみました。〉

日曜日は、「教会の歴史において、つねに特別な注目を集めてきました。キリスト教の秘義の核心、キリストの復活と密接な関係があるからです。」

社会や経済の大幅な状況の変化、日曜日のミサへの出席者の減少、司祭の不足を前にして、「(日曜日のミサに関する)深い教理的な基礎を取り戻し」、信者が「キリスト教生活における日曜日の変わらぬ価値」をはっきりと認識できるようにすることが、「かつてないほどに必要です。」

創世の書によると、創造のわざを終えた神は七日目を祝福し、聖なる日とされました。ですから安息日の掟は「神のご計画の深みに根ざしています。」この掟は十戒に入れられ、教会はそれを「共同体の単なる宗教上の決まりではなく、神と私たちの関係を示す明確で取消しのできない表現であると考えています。」

「人間と神とのつながりは、外的な祈りの時間をも要求します。その時、神とのつながりは熱心な対話に変わります。〈主の日〉はこのつながりの日なのです。」

日曜日は「信者に毎週、世の救いの源である復活祭の出来事について考え、それを生きるよう促します。…復活の五十日後、マリアと共にいた使徒たちに聖霊が力強く下ったのも日曜日でした。聖霊降臨は教会の始まりを告げる出来事というだけでなく…過越の秘義との密接な関係ゆえに、今も毎日曜日の深い意味の一部となっています。」

「日曜日は究極の、信仰の日です。…それは、日曜日の聖体祭儀が…信仰宣言を伴うという事実によって強調されています。信仰宣言は、日曜日が洗礼と過越に関わる性格を備えていることを明らかにします。」

日曜日は「ご自分の民の中に生きておられる、復活された主の現存を祝う日です。この現存をふさわしく宣言し、生きるためには、キリストに従う人々が個々に祈るだけでは十分ではありません。」「一人の個人としてではなく、神秘体の一員として救われ、神の民の構成員となる」のですから、「みな一緒になって、教会が何者であるかを余すところなく表わすことが大切です。…皆が共に復活の主に呼ばれています。」

「聖体祭儀は、教会生命の真の姿を特に集約された形で表わすだけでなく、ある意味で教会の〈源泉〉です。特別な荘重さを備え、共同体の参加を要する日曜日の聖体祭儀は、他の聖体祭儀の範例となっています。」

「キリスト信者の家庭にとって日曜の集いは自分たちのアイデンティティと、〈家庭教会〉としての〈役務〉を最も明確に示すものです。…カテキスタの助けが大切ですが、子供に日曜日のミサにあずかることを教える義務を持つのはまず両親であることを思い出さねばなりません。」

日曜のミサは様々なグループ、運動、団体、宗教共同体に出会うチャンスです。「それぞれの霊的な道（教会の権威が吟味し、合法と認めたもの）の違いを越えて、最も深いところで分け合うものについて共通の経験を誰もが持つことができます。小人数でのミサが日曜日には奨励されないのは、こういう理由からです。」

「神の言葉を聴く信者は、聖書の的確な知識と、司牧上可能ならば聖書、特に日曜や祭日に読まれる箇所を読んで理解を深めるための特別な企画などによって、ちゃんとした準備をしておかなければなりません。…週日に教区共同体で司祭や役務者、信者が集まって、日曜日の典礼に備えて前もって神の言葉を黙想するのは、価値ある試みです。」

第二バチカン公会議は、正当な理由がない限り日曜日のミサの説教を省いてはならないと述べています。「主のみ言葉の役務を行なう人々は、その内容を忠実に表わし、それを人々の関心事や日々の生活に当て嵌めることができるよう努めねばなりません。」

「み言葉の食卓は、自然に聖体のパンの食卓へと導かれます。…主の晩餐を共にすることは、私たちのためご自分をいけにえとして御父にお捧げになったキリストとの交わりです。ですから教会は、信者がふさわしい準備をし、重大な罪があれば告解の秘跡で神の赦しを受けているかぎり、聖体祭儀に参加して聖体拝領するように勧めます。」

「キリストとの交わりは兄弟姉妹との交わりと深くつながっていることを心に留めることも重要です。…それは、歓迎の態度と、共同体全員の必要を考慮した祈りによって支えられています。」

「聖体祭儀は教会の中だけで終わりません。」信者は「日々の生活の中で福音を広め、証しするよう呼ばれている」からです。「聖体を分かち合った全ての人が委ねられた責任をさらに深く感じ取るよう、聖体拝領後の祈り（拝領祈願）と典礼が終わってからの祈り（閉祭の祈り）をもっと大切に考える必要があります。」

聖体を真の中心とする日曜日には、信者の参加が必要となります。これは「通常、重大な義務であると理解されています。」今日では反感や無関心が、多くのキリスト信者の障害となっています。「信者が障害に圧倒されないためにはキリスト教共同体の支えが必要です。だからこそ、信仰生活にとって決定的に重要なのは、日曜日に皆が集まって、新約の秘跡の中で過越の主を祝うことだと心から納得しなければならないのです。全ての信者が日曜日を大切にし、〈まことの主の日〉として聖化するよう努めることは、特に司教の責任です。…司牧者には、誰もが掟を守ることを可能にする義務があります。」

「土曜日の夕方のミサに行っても義務は守れるという決まりで、時に祝日の前夜ミサと呼ばれる典礼が実質上、日曜日の祝日のミサになり、司式者には説教と、共同祈願の祈りを唱えることが必要になりました。」「司牧者は、信者が日曜日に外出する時には、どこであれミサにあずかる配慮をすべきことを思い出させなければなりません。」

「日曜日のミサの本質と、信者の生活におけるその重要性から…式がふさわしい祝祭の性質を持てるよう、特に心を込めた準備が必要となります。…皆で歌う歌にも心を配ることが大切です。歌は喜びを表に表わすのに最も適した方法ですから。同時に、歌が典礼の要請にそい、教会の伝統に値するものであるよう配慮しなければなりません。」「さらに出席者全員が、子供も大人も、積極的な興味を抱くよう、典礼の勧めに従って参加を促すことが必要です。」

「日曜日に聖体祭儀を執行する司祭がいない場合、聖座から司教団に委ねられた教えや指示に従い、司祭なしでも日曜日には集会を行なうよう教会は勧めています。」「病気や身体障害その他の深刻な理由で参加できない信者にとって、テレビやラジオは貴重な助けです。特に（特別の役務者である）聖体奉仕者が、病人のもとへ聖体を運べる場合には。」ただしいずれの場合も、ミサにあずかったことにはなりません。

「主が復活された日であるという重要性のため、神の創造のみわざと〈新しい創造〉を祝う日曜日は、特別な意味で喜びの日であり、喜びの本質と根源を再発見するすべを学ぶのに最もふさわしい日です。」

「日曜日の休みを通じて、日々の心配事に良い見通しをつけることができます。物質的な事柄が霊的な価値に道を譲り…人それぞれの状況の中でもキリスト信者は自然に、法が日曜日を聖なるものとする義務を尊重するよう促すことができます。」「日曜日は、愛のわざや使徒職に身を捧げる機会を与えます。復活された主の喜びを心の奥に体験することは、主の心に脈打つ愛を残らず分け合うことでもあります。」

「週ごとにキリストの死からの復活を実現させる日曜日は、時間の意味を明らかにする日でもあります。栄光に満ちたキリストの復活という出来事が予想させる、主の再臨を予告しているからです。」

「その意義と重要性が完全に理解されるなら、日曜日はある意味で、キリスト信者の生活の総合となるでしょう。…主の日を守ることがなぜ教会の生命にとってとても大切であるのか、これではっきりと理解できることでしょう。」

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■定価：送料とも一部186円　■年内定期購読：送料とも一部2,087円
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448